

## 難波抱節旧蔵「温知堂文庫」に

ついて

三浦 豊彦

労働科学研究所図書館にはゲッチンゲン(Göttingen)医学古典文庫(ゲッチンゲン文庫)、生理学者フェルヴォルン(Vervorn, M., 1868~1921)旧蔵のフェルヴォルン文庫のほか一七〇一九世紀を中心にした和漢の医書、儒書関係の三、八七九冊の「温知堂文庫」を収蔵する。

この文庫には旧蔵者の難波家が一九一三(大正二)年の冬に調査した蔵書目録が残っている。この目録は「温知堂蔵書」となっていて、「温知堂文庫」はここから出ているのである。

蔵書のなかには岡山藩、金川で家老日置氏の侍医であった難波抱節の学塾「思誠堂」の蔵書印が多く見られる。

抱節校の『産術辨』には「思誠堂」蔵と「備前金川難波蔵書」の印がある。

抱節については森紀久男著『抱節難波立愿』(難波二郎発行、一九四一年)や中山沃「難波抱節と緒方洪庵」(『医学選粹』、第四号、一六〇一八、一九七五年)にくわしい。

難波抱節は一七九一(寛政三)年八月三十一日、篠野文次郎貞文(後に五十村貞文と改姓)の二男として岡山に生まれた。しかし、一八〇一(享和元)年、十二歳の時に父を失い、以後、叔父の篠野盛堅に養われ成人した。後に金川で代々医を営む難波経寛つひひろの養嗣子となった。難波家は備前岡山藩の家老日置氏の侍医だった。

抱節、名は経恭、字は子敬、立愿りつげんは通称、竹の節操を愛し、号を抱節としたという。

一八〇五(文化二)年、十四歳のとき、京都に出て、服部星溪について医学を修めた。業成って金川に帰り、経寛の三女モトと結婚した。

一八一(文化八年)三月に再び京都に出て、産科の大家、賀川蘭斎の門に入った。この年の十二月に、郷里の妻が二十歳で死んだので一時帰郷したが、翌年にはまた上京、一八一二(文化九)年八月には賀川流の産術を修了し許可書を与えられた。その後、賀川の学塾で学び、「産科記聞」

その他を記述したが、さらに吉益南涯について内科を学んだ。

一八一四（文化十一）年には外科を華岡鹿城（華岡青洲の弟）に学んでいる。

一八一五（文化十二）年に故郷で開業するとともに学塾「思誠堂」を設立した。二十五歳のころである。名医として知られ、患者は出雲、備後、讃岐から集まり、大阪の鴻池家からも治療を求められたという。産科と外科にすぐれ、華岡流の麻沸散を用いて乳癌や脱疽の手術も行っている。

一八二九（文政十二）年、三十八歳のとき、京都に出て吉益北洲にも学んだという。

抱節の「思誠堂」にはその学識と徳望をしたって六〇余州のうち飛騨一国を除いて全国五三藩から一、五〇〇人の門弟が入門した。

この思誠堂では医師の教授をするだけではなく、基礎学料として論語、孝経、古事記、日本書紀、貞観政要、文章軌範、十八史略なども読ませたとという。

書生の日課は、毎朝卯の刻、午前六時に起床、顔を洗

い、庭を掃き、薬を調合し、膏薬をねり、朝は医書を講じ、午後は儒書を読み、夜は医書を討論して疑わしいところを質し、その合い間に患者を相手に臨床訓練を行ったという。

温知堂文庫に儒書が多く含まれているのは上記の事情によるからであろう。

また、抱節は豊後国日出藩士帆足万里（一七七八〜一八五二年、江戸後期の儒学者、理学者）と親しく、息子経直を万里のもとに遊学させている。万里の著書の『窮理通』が写本を含めて数種あるのはこうしたことと関係があるのであろう。

抱節の名著『胎産新書』十巻は刊行されず、多紀元堅と帆足万里の序文をつけた定稿本として残ったというが、残念なことに「温知堂文庫」には含まれていない。

抱節の二女の濱は一八二五（文政八）年二歳で天然痘で死去している。やがて牛痘種が伝来する。抱節は一八五〇（嘉永三）年に足守の除痘館を訪ねて、年下の緒方洪庵から牛痘種とその技術の伝受を受けた。二月から四月にかけて三、〇〇〇人以上に接種した。唯一の刊本である『散花

新書』もこの年出版されている。

抱節は一八五九（安政六）年のコレラの大流行のあったとき、治療に力を尽したが、自身も感染、八月二十三日に急死した。

温知堂文庫は一八二四（大正十三）年ころ、岡山の難波家では当主が医師でなかったので不要になった蔵書五千部があるというので、当時、倉敷労働科学研究所の暉峻義等所長がこれを購入、馬車で倉敷まで運んだという。購入費五千円だったという。この購入費は大原孫三郎倉紡社長が負担したのであろう。

明治初年の書物が含まれているのは抱節以後の経直（立憲）、立達時代に収蔵したものであろう。温知堂文庫の目録と著者索引は保坂捷子の整理によって一九七八～八〇年にかけて『労働科学』誌に分載されている。

（労働科学研究所）

## 岡山県医学校旧蔵、田口和美著

### 『解剖攬要』について

中村 昭

『解剖攬要』はその凡例によると、田口氏が「東京大学医学部解剖局ニ於テ数年間独乙国解剖学博士デーニッツ氏ニ親炙シテ實際ニ歴驗スル所ヲ輯録シ旁ヲ独英二国ノ解剖所ニ参互シ」て編纂し、明治十年に英蘭堂から出版したものである。

これは全一三巻だが、最初の明治十年に出版されたのは一〇巻までで、その後明治十四年には一一巻と一二巻が出、明治十五年に一三巻が出て完成した。この出版がなぜこのように遅延したかは不明だが、明治十年にこれを購入した人は実際上不便だったことだろう。

ところで英蘭堂では、デーニッツ氏よりも前に東校教師として赴任していた内科の Hoffman 氏と外科の ミュラー 氏による解剖学の講義録を、山崎元修の筆記によって『医科